ラリグラス・ジャパン News Letter

#08
2023
6月号

小さい子どものシャワーを手伝う高学年のお姉さん。
明るい声が響く施設内だが、生活苦から子どもを捨てる親が絶たない。
ベイビールームには 10 人以上の乳児や幼児が保護されていた

仲夏の候、皆さまにおかれましては元気にお過ごしでしょうか。

新型コロナウイルス感染症の流行が始まって以来、現地訪問を控えておりましたが、この度、3年8カ月ぶりにネパールの地を踏むことができました。

まず驚いたのは、街中を行き交う人たちだけでなく、マイティやNDWSの女性や子どもたちもまったくマスクを着用していなかった点です。ソーシャルディスタンスを気に掛ける様子もなく、現地はすっかりかつての日常を取り戻したように感じました。

しかし、聞き取り調査を進めるうちに、やはりコロナ禍によって被ったダメージからはまだまだ脱しきれていないということがわかりました。

旅行業はネパール経済を支える重要な要素です。少しずつ旅行者も戻りつつあるようですが、以前のインバウンド数とは大きな開きがある状態です。ホテルやレストラン、土産物店をはじめ、食材を提供する業者や農家など、広範囲に渡って不景気が連鎖しているようです。

そこへ日本同様、物価が著しく高騰し、一般の人々は必需品以外の物を買い控える傾向にあります。そのため、なかなか経済の回復は見込めず、困窮世帯はさらに増加傾向にあるとのことでした。

今回のニュースレターは、そんなネパールの実情を中心に、マイティ・ネパール、NDWS、レスキュー・ファンデーションの活動についてご報告いたします。

認定NPO法人 ラリグラス・ジャパン
〒108-0072 東京都港区白金3-10-21　TEL&FAX 03-3446-2193
E-mail：info@laligurans.org　http://www.laligurans.org

現地活動報告　マイティ・ネパール

現在、ネパール国内のセックスワーカーは、カトマンズ市内だけで少なくとも1万人以上にのぼるといわれている。マイティの調べによれば、その大半が農村部から人身売買された女性たちだ。

新型コロナウイルス感染症 の蔓延は、彼女たちの生活に打撃を与えた。感染拡大を防ぐため、'19年3月から4カ月間のロックダウンが実施されたため、まったく仕事ができなくなったのだ。彼女たちの窮状を知ったマイティは、すぐに米や豆などの食料品やマスクをはじめとする日用品、金銭の支給に乗り出し、活動は後も継続された。

その過程で2つのセックスワーカー（14歳～68歳）の自助グループとつながりができた。マヤ（50代）をリーダーとする約30人のグループと、サムジャナ（30代）をリーダーとする20人程のグループだ。知らぬ間に妊娠し、月日が流れるうちに出産に至るなど、子連れのセックスワーカーもおり、そうした子どもも含めると60人強の集団となる。客や警察とのトラブルや、病気や子どもの問題など、リーダーが相談を受け、互いに助け合っているという。マイティはこの2つのグループを継続支援しているのだ。

食料品や金銭の支給だけでなく、力を入れているのはテンプドライバーや重機オペレーターや美容師などへの転職サポートだ。1～2万ルピーで開業できる屋台を開くという道もあり、この3年弱の間に約300人の転職が実現した。

アヌラダさんが定期的に行っている夜間巡回に同行した。繁華街で屋台を営む元セックスワーカーの20代女性は、「売り上げは今一つだが何とかやれている」と笑顔を見せてくれたが、賑やかな通りを抜けると状況は一転する。シャッターを下ろした商店の軒下や橋の下で大勢の人が眠っており、中には年配の女性の姿もあった。アヌラダさんいわく、

「あの女性はセックスワーカーです。ただ同然で客の相手をしています。危険な環境にあるので施設に入るよう声をかけていますが拒まれます。自由でいたいのでしょう」

こうしたハイリスクのセックスワーカーの支援を今後も続けていくとのことである。

2つのセックスワーカー・グループを集め、
国民票を持たない女性のために申請を代行するマイティ。
ラリグラスからは、53人の女性に1人あたり500Rsを支援した

かつての日常を取り戻したネパールだが、ホスピスの女性たちには提携する外部の病院にかかる時か、マイティ本部で大きなイベントがある時ぐらいしか外出の機会はない。閉鎖的で単調な生活はストレスが溜まるため、長年、本部の職業訓練の講師を務めてきたヨショーダさんを昨年から常駐させ、読み書きやヨガ、ダンスを教えてもらっている。楽しく学んでいるようで、今回訪問時、ダンスと演劇を披露してくれた。

数カ月前、新しいスタッフとして若い夫婦（夫は門番、妻は調理）が雇用された。夫婦には1歳の男児がおり、みんなのアイドル的存在となって雰囲気を明るくしていた。

ヘタウダ・プリベンション・キャンプは25人の女の子を対象に職業訓練が行われていた。順調に運営されているようだが、コロナ禍の頃は本当に大変 だったという。外出制限によるストレスから世界的にDVの報告件数が増加したとされるが、ネパールでもDVやレイプ事件が増加し、毎日のように相談が持ち込まれた。ワクチンが不足し、スタッフは未接種のままだったが、感染者で溢れる病院に妊婦を連れていくなど動かなくてはならない。ついに感染し、死ぬほどの思いをしたそうだ。やっと日常を取り戻したものの、犯罪件数は未だ増加傾向にある。4月中に持ち込まれたレイプケースは9件あり、5歳～11歳といった幼子も被害に。今回訪問時は、妊娠8カ月の少女（13歳）が保護されていた。親戚の男にレイプされるも口外したら殺すと脅され、お腹が大きくなるまで一人苦しんでいたという。

ダンスを披露してくれたホスピスの女性たち

プリベンション・キャンプで学ぶ女の子たち

レスキュー・ファンデーション（RF）

コロナ禍を脱し、ますます精力的な活動を行っているレスキュー・ファンデーション。'22年中には、500人以上を売春宿から救出し、過去最高の成果を記録した。売春宿の経営者や人身売買犯罪に加担した者などの逮捕者は100人を超える。600人余りを犯罪から守り、同じく600人強の女の子の社会復帰をサポートした。

'22年には何件もの大掛かりな救出を行った。一例をあげると、ビハール州とその周辺地域で人気の「ダンス劇団」に閉じ込められていた少女45人を救出したケースだ。

映画はインド最大のエンターテインメントである。女の子であれば、煌びやかな衣装をまとい、華麗に踊る女優に一度は憧れる。さすがにスクリーンに登場するのは無理だとしても、歌やダンスの仕事に携わりたいと夢見る少女は少なくない。

そうした女の子がターゲットとされる。ある貧しい12歳の少女は、エージェントからダンス劇団に誘われた。インドには結婚式をはじめとする様々な行事の際、劇団を招いて歌や踊りを披露してもらう伝統がある。劇団のダンサーもまた少女たちの憧れの職業のひとつであり、少女は胸躍らせた。両親も「名声とお金が保証される」との甘言に踊らされて娘を送り出した。

しかし、エージェントは人身売買業者だった。約束どおりダンスを披露する機会は設けられたが、パフォーマンスのステージは売春宿の真ん前。肌も露わな恰好で、酔っ払った男たちの前で踊らされた。ダンサーとは名ばかりで、クライアントを獲得するためのディスプレイとして働かされたのだ。

昨今、ダンス劇団の問題が取り沙汰され、意識の高いコミュニティでは、結婚式や祝賀会に劇団を招くという風習を断ち切る動きが見られつつあるという。しかしその人気はまだまだ高く、「ダンス劇団」という言葉に憧れを抱く少女は後を絶たない。多くの少女がインドのいくつかの州から、さらにネパールやバングラデシュから人身売買されているのだ。

EKATRAの運営は順調だ

RFが内偵時に撮影したダンス劇団の女の子

ネパール障がい者女性協会（NDWS）

NDWSは、ゴダワリ市と協力して、村での障がいの調査、障がい者手帳の発行、車いすや歩行器等の配布を行っている。また、地域住民に障がい理解を啓発するため、研修を行ったり、インフォメーションボードを目につきやすい場所に設置したりしている。今回のニュースレターでは、調査の過程で見つかったある親子について紹介したい。'18年からNDWSが支援している親子で、娘のサラスワーティさんには脳性まひがある。サラスワーティさんは母親と兄夫婦とともに暮らしている。山道の中腹にある家は、'15年に起きた地震で崩壊し、トタン屋根でできたシェルターを敷地内に作り、そこに一時期避難していた。その後、政府からの支援などを受けて新しい家を建てた。ところが、兄夫婦は新しい家に移ったものの、サラスワーティさんと母親はトタン屋根の小屋での生活を続けている。2人の兄がいるが、兄の一人は出稼ぎに行っており、もう1人の兄が、新しい家に入ることを許さないとのこと。

NDWSは、'18年にサラスワーティさんの住む地域の調査を行い、母親と出会った。サラスワーティさんは歩くことができず、母親が障がい者手帳の申請に来ていたそうだ。話を聞いた後、スタッフが家庭を訪問し、定期的な支援が必要なケースであると判断した。その後、布団や食料等の生活に必要なものを支援し、定期的な訪問を続けるとともに、兄夫婦とも話し合いをしようとしてきたが、兄夫婦はいつも不在で、話し合いに応じてくれないという。サラスワーティさんと母親の居住環境は劣悪で、隙間風やむき出しの地面から来る底冷えを何とかしのぎながら生活している。NDWSの代表であるリタ氏が人権問題であることを議員に訴えたが、個別のケースを扱うことは難しかったようだ。

ネパールでは、障がいを前世で犯した罪の罰であるという考えがまだ根強く、障がいのある子どもが生まれたら隠す家庭も少なくない。母親も年齢的に彼女を抱きかかえることが難しいため、小屋からほとんど出ることなく過ごしているという。NDWSでは、兄夫婦と話し合いができるように定期的に訪問するとともに、母親とサラスワーティさんの生活環境改善について、行政とも話し合いを続ける予定である。

サラスワーティさん

障がい者手帳の発行業務

委託販売

共栄学園中学高等学校　ボランティア部顧問
鈴木明子さん

ラリグラス・ジャパンを知ったきっかけを教えてください

レスキュー・ファンデーションの代表トリベニさんが東京大学で講演会をした際、知人の勧めで参加し、初めてラリグラス・ジャパンさんの活動を知りました。その後、『少女売買』を読み、スタディツアーに参加させていただきました。

委託販売を始めたきっかけや経緯について

ボランティア部という名称ですが、固定の部員はおらず、その都度企画ごとに参加者を募っています。'17年の文化祭では、国際支援の一環として助けを必要としている海外の子どもたちに学用品などを支援する活動をしたいと生徒から相談されました。ミサンガを作って売りたいとのことでしたが、折角なのでミサンガだけではなく以前より交流のあったラリグラス・ジャパンさんに依頼し、委託販売もさせていただきました。その年はミサンガだけで10万円以上の収益を上げました。以後、ミサンガから募金ガチャガチャに変更しつつ、委託販売とともに細々と継続しています。'20年12月には高校生ボランティア・アワードで表彰状をいただきました。

文化祭に初出店の時

どのように販売をされていますか？

商品だけではなく、なぜこの委託販売をしているのかを説明しています。ネパールという国の現状やマイティ・ネパール、ホスピスおよびレスキュー・ファンデーション、ＮＤＷＳ等について掲示をし、商品一つ一つにエピソードトークをするなど、買ってくれた方の記憶に残り、支援が継続するように心がけています。毎年楽しみに見に来てくれる方も出てきました。

委託販売のやりがいは？

現金化される達成感が一番嬉しく感じます。なかなか売れない商品も、手に取って直接お話をしながら勧めると買ってくれることがあります。特に、ホスピスの方が作った作品が売れるとすごく嬉しく、説明に熱が入ってしまいます。人と人を繋ぐそんな瞬間にやりがいを感じます。

次回の販売のご予定があれば教えてください。

'23年度の文化祭で販売予定です。

生徒さんと共に支援を継続してくださることに、心より感謝申し上げます。

'22年度に販売を担当してくれた生徒さん

Information

ラリグラス・ジャパンでは、皆さまからのご寄付を募集しています。
一口 1,000 円から、下記のプロジェクトへの指定寄付も募っています。
ぜひ、ご協力をお願い申し上げます。

- **お菓子詰め合わせプレゼント**
- **職業訓練プロジェクト**
- **テーラー開業支援プロジェクト**
- **ＥＫＡＴＲＡプロジェクト**

お菓子プレゼント

振込先はこちら!

郵便振替
口座番号：00100－5－713661
加入者名：トクヒ ）ラリグラス ジャパン
※銀行振込の場合
銀行名：ゆうちょ銀行
支店名：0一九（ゼロイチキュ）店（019）
口座番号：当座 0713661

銀行振込
銀行名：三菱UFJ銀行
支店名：麻布支店（店番：570）
口座番号：普通預金 0158054
振込先名義：トクテイヒエイリカツドウホウジン
ラリグラスジャパン